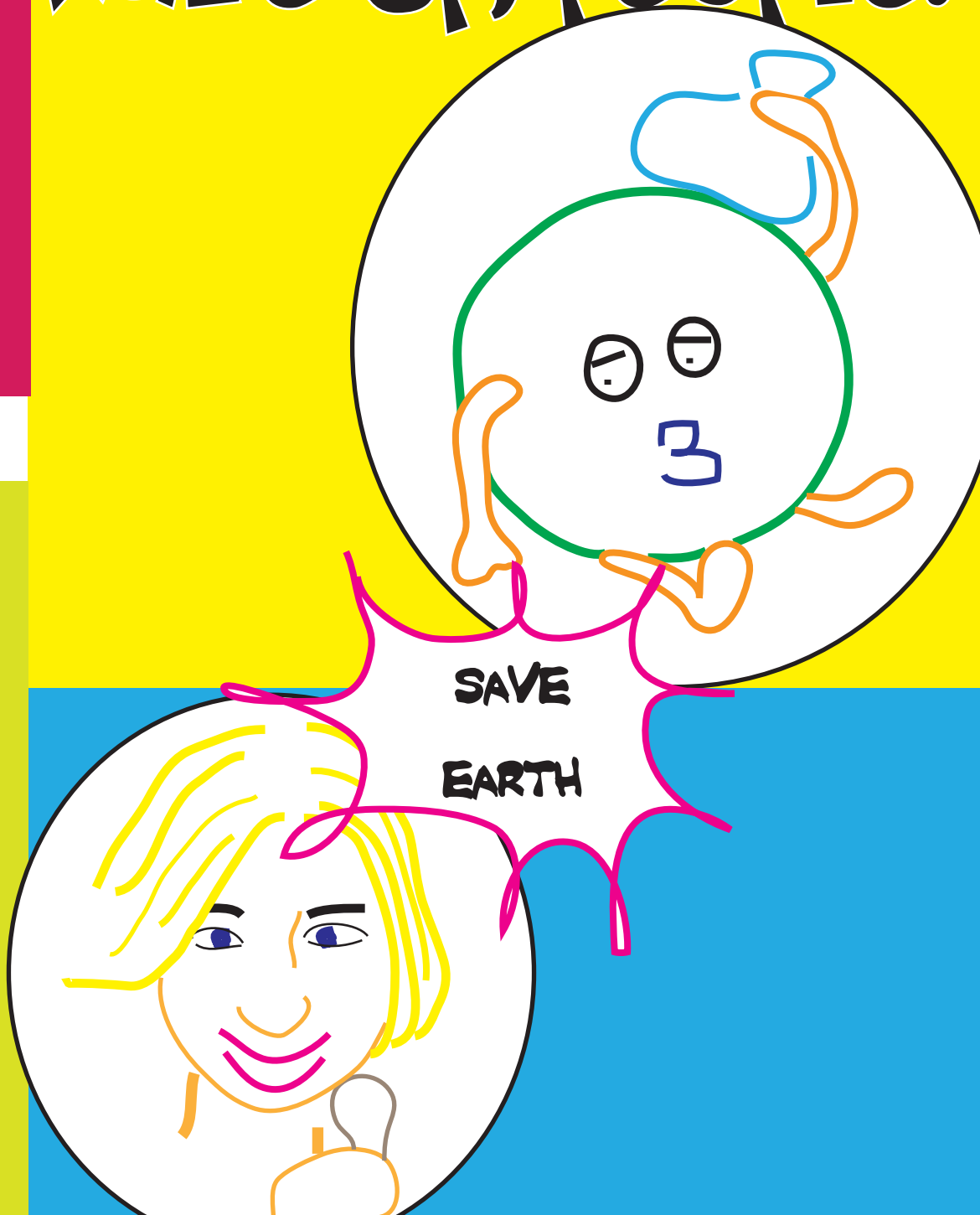
MORIMURA SEMINAR 2009

ERIKA NAMIKI
SATOMI SHIRAKAWA
TOSHIYA TAKAHASHI
YUMA KATSUMATA

Wake Up, People!



０．はじめに

今回、私たちは第４章～第７章までを扱う。

「地球温暖化」をはじめとする「環境問題」への取り組み方を、私たちは「知って」いる。だが、文献にもあるように私たちは「分かって」いない。

１９７０年代、「公害問題」として扱われていた環境問題から、「環境問題」と呼ばれる環境問題へと意識が転換した。
今回の発表では、その意識の転換の経緯について説明する。そして、「沖縄のサンゴ礁」と「アメリカのプリウス車」を例にして、「環境問題」対策の現状を探る。また、「地球温暖化」に対する見解の不一致を知り、原因を考察する。

環境問題に対して、あなたは何を信じることが出来るだろうか。

１.「環境問題」とは

■エコロジー（ecology）

・元来

＝生物とその生息地の「環境」との関係を研究する学問

「エコ（eco）」→オイコス（oikos）「家族、家庭、住処」

・現在

＝環境を大切に考えること

■「環境問題」の変遷

・自然の変動

疫病、飢饉、災害

・人為的災害

公害、自然破壊、大気・水質汚染、土壌や天然資源の枯渇

■政府主導型の環境対策

1920s　国有林、国営野生生物保護区の国家国有化（セオドア・ルーズベルト）

→政府の資産とする

1962　『沈黙の春』（レイチェル・カーソン）

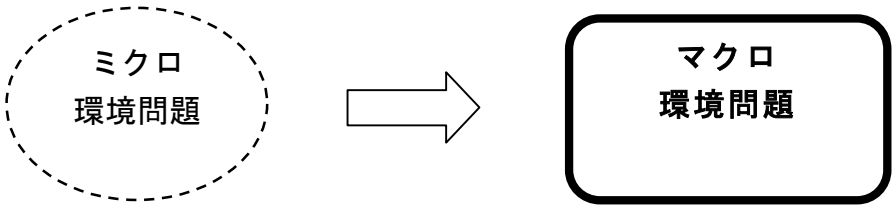
ＤＤＴという農薬が、人体や生態系に影響を与えることを指摘

→政府権力、大企業のよる環境対策の権力拡大を批判

1970　ローマクラブ設立（スイス）

「成長の限界」

＝人類の経済活動から人口まですべてが抑制、コントロールされるべき



個々人の生活環境の問題　　個々人が直接関わることのできない問題

２．環境問題の捉え方

（１） 地球温暖化でサンゴ全滅

■沖縄のサンゴ減少の原因１（P.147、2008 年 1 月 7 日の産経新聞の記事より）

①沖縄のサンゴは、温暖化で死滅の危機にある

②沖縄のサンゴは、海水温の上昇で減少している

→「**地域**環境問題を、「地球温暖化」という大風呂敷でごまかしている」（P.145）

■沖縄のサンゴ減少の原因２（吉嶺全ニによる考察）

→沖縄のサンゴ絶滅問題は、

①「地球温暖化問題」発生以前に発生、存在確認

②本当の原因は、**「赤土流出」**

→沖縄県主導の農業基盤整備事業による

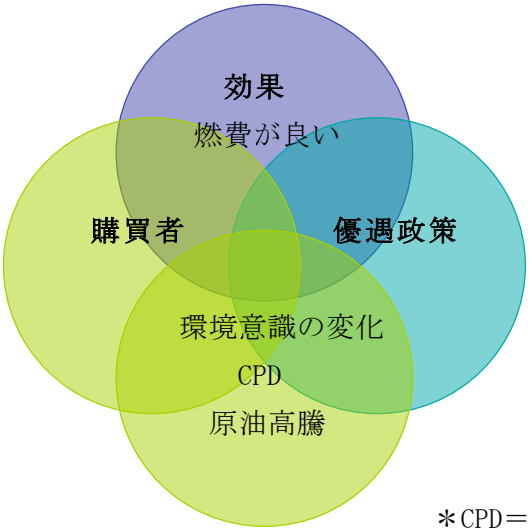
・吉嶺による結論

沖縄県は、サンゴの減少の原因を、自らの責任である**「赤土流出」**から、世界規模の問題である「地球温暖化」にすりかえた。

（２）アメリカでのプリウス人気

■プリウス…日本を代表する「環境にやさしい商品」

■プリウス人気の４つの要素



＊CPD＝現在の危機に関する委員会所属（CPD）

■ウールジーの主張

・多くの石油輸出国＝中東地域＝反米

⇒石油輸入量を減らすことによって経済的に締め上げることができる

⇒反米テロリストグループに回る資金を断つことができる

３．地球温暖化という「環境問題」

■一般的な「地球温暖化問題」の捉え方

① 気候変動、海面の上昇を引き起こす
② 原因は二酸化炭素
（※IPCC 第四次評価報告書から）

→一人一人が二酸化炭素を出さない生活をしよう
（グローバリズムという概念で世界を管理）
EX. むだな待機電力を減らそう
可能な時には歩くか、自転車に乗ろう
カーボンオフセットを購入しよう
（参照：『不都合な真実』）

■副島氏らの「地球温暖化問題」の捉え方

① 「CO2 排出＝悪」という公式は、作られたもの
② 地球の気温の上がり方は一様ではない
③ 「大きい問題」が故に、様々な環境問題の原因にされる
EX.サンゴ礁
④ 海面上昇、雪氷縮小は起きていない
⑤ 地球温暖化を防ぐには、国全体で活動そのものを停止する以外にない

→地球温暖化はそもそも起こっていない
また、あったとしても国民一人一人に対策を強いるのは許されない

４．おわりに

これまで、「環境問題」と呼ばれる環境問題について説明した。
それは、政府・大企業がイニシアティヴをとって環境保護政策を進めるために作りあげていることが分かった。そこには、利害関係が裏にある。また、公害などの問題を「環境問題」という言葉ではぐらかすことを可能にする。

沖縄のサンゴ礁の例では、赤土という原因の可能性が分かっているにも関わらず、「地球温暖化」という問題にしてしまっている。アメリカのプリウス人気には、「環境のため」と謳っておいて、軍事的・政治的背景を負っている。

ある環境問題の原因を「マクロな環境問題」に求め、加害者・被害者の関係をうやむやにしているのだ。政府・大企業による環境政策では、本当の環境問題は見いだせられない。また、私たちも加害者・被害者意識をもてず、危機感なしの「エコ活動」をしてしまう。

さらに、「地球温暖化問題」には正反対の捉え方がある。そもそも、「地球温暖化」が起きているか分からない。それを、起きているという前提で、節電やエコバッグを促している。

もちろん、地球温暖化が起きているかもしれない。しかし、その可能性を鵜呑みにして、メディアが喧伝する行動をとることではいけない。あなたは、エコバッグによってどのように地球に優しいかを実感することが出来るであろうか。それに対して、街のゴミをひとつ拾えば、確実に環境に貢献していると言える。

「マクロな環境問題」から「ミクロな環境問題」へと視点をシフトする必要がある。

Think local, Act local.

私たちは、見える環境問題に則して行動するしかない。
信じることができるものは、目の前に起きていることだけである。

参考文献

アル・ゴア『不都合な真実』2007
武田邦彦『環境問題はなぜウソがまかり通るのか』2007
武田邦彦『環境問題はなぜウソがまかり通るのか２』2007
池田清彦・養老孟司『ほんとうの環境問題』2008
池田清彦・養老孟司『正義で地球は救えない』2008

MEMO